

十勝の金融経済概況

1. 全体感

十勝の景気は、東日本大震災の影響による下押し圧力が和らぐ中で、持ち直している。

最終需要面をみると、公共投資は、弱めの動きとなっている。一方で、個人消費は、震災の影響による落ち込みの後、持ち直している。設備投資も、弱めの動きにあるものの、一部に持ち直しの動きがみられる。また、住宅投資は、足元では新築着工戸数が増加している。この間、雇用情勢は持ち直しの動きが続いている。

2. 最終需要の動向

(設備投資)

設備投資は、弱めの動きにあるものの、一部に持ち直しの動きがみられる。

(個人消費<含む観光>)

主要小売店の売上高(7月、10社)は、天候に恵まれたことから食料品及び衣料品販売が好調となったため、全体では前年を上回った。

耐久消費財の売行きをみると、乗用車新車登録届出台数(8月)が、震災後の供給制約の緩和から持ち直した。一方で、家電販売は、7月には地デジ移行のテレビ等の買換え需要などから、堅調な動きとなったが、8月入り後は、こうした買換え需要の剥落から、伸び悩んでいる。

震災の影響から大きく落ち込んだ旅行・観光関連では、道内客中心に持ち直しており、とち帯広空港の乗降客数(8月)は、減少幅が縮小した。また、十勝川温泉の宿泊客数(7月、4社)が、ほぼ前年並みの水準となったが、市内ホテルの宿泊客数(7月、8社)は、ビジネス客や団体客の入込みが堅調であったため、前年を大きく上回った。

(住宅投資)

新設住宅着工戸数(7月)は、政策支援の変更による駆け込み需要など一時的な要因もあって持家が増加したほか、貸家も増加し、2か月連続で前年を上回った。

(公共投資)

公共工事請負金額(8月)は、2か月連続で前年を上回ったが、年度初からの累計額では依然として前年を下回っており、基調としては弱めの動きとなっている。

3. 生産・雇用・企業倒産の動向

(農業・食料品)

生乳生産量(7月)は、乳牛の体力低下や種付けの遅れから、前年水準を若干下回った。乳製品生産量(7月)は、原料である生乳の道外移出増等の影響から、引き続き前年を下回った。

農作物の生育状況(9月1日現在)は、7、8月の気温の上昇を受けて、全体的には平年より進んでおり、生育状況は平年並みである。

(木材)

製材品の生産量(7月)は、カラマツ材で自動車メーカーの生産回復に伴う梱包用材向け需要が増加しているほか、エゾトドマツ材でも足元での住宅着工増の影響から需要に動意が窺われることから、全体では前年を上回った。

(電力消費)

電力消費量(7月、除く電灯)は、電気機械、食料品製造業等で増加しているが、冷房需要の減少から、全体では前年を下回った。

(労働需給)

求職・求人状況(7月、常用)をみると、有効求人数の伸びが、有効求職者数の伸びを上回った結果、有効求人倍率は0.55倍と前年同月(0.51倍)を23か月連続して上回った(+0.04ポイント)。

(企業倒産)

企業倒産(8月、負債額10百万円以上)は、件数1件、負債額1,990百万円となり、負債額では前年(1件、負債額70百万円)を大きく上回った。

4. 金融情勢

(預金動向)

帯広市内金融機関の実質預金残高（7月末）は、個人向け国債償還金の歩留まりを主因に、引き続き前年を上回った。

(貸出動向)

貸出残高（7月末）は、法人向けが低調なため、ほぼ前年並みの水準に止まった。

この間、貸出約定平均金利（7月末、総合）は、銀行、信金とも、ほぼ前年並み圏内となった。

(銀行券)

銀行券の動き（8月中）をみると、発行額、還収額ともに前年を上回ったが、還収額の増加幅の方が大きかったため、発行超額は34億円と前年（36億円）を下回った。

以 上